

第33課 ショートメッセージ 「喜び祝う日」

聖書箇所：ネヘミヤ7：72－8：12

暗唱聖句：主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。（ネヘミヤ8：10）

ネヘミヤの熱い祈りと働きにより、エルサレムの城壁再建が始まりました。バビロン捕囚からの帰還後、神殿の再建までは長く険しい道のりがありました。そして神殿の完成後も、城壁のないエルサレムは外敵の脅威にさらされ、真に独立した街とは言えないまま約70年を過ごすこととなりました。ネヘミヤは城壁を作ることで、まずエルサレムを強固な街、自立した街とすること、そして街を純粋なイスラエルの民で満たすことを願っていました。

城壁の再建に着手してから完成するまでは、52日間。神殿は中断期間も含めて20年以上かかったことと比べると、ずいぶんスムーズに見えます。しかしネヘミヤ記3～6章には、ち密な計画と役割分担の元に工事が行われたこと、それでも様々な困難により工事が難航したことが書かれています。ネヘミヤが外部からの嘲り・暴力・脅しなどにも、祈りつつ適切に対処する姿や、城壁の完成により敵たちが神の力を認める姿などは、どこか痛快でもあります。一部は聖書日課にも含まれていますので、是非お読み下さい。

さて、城壁が完成した後に民がまず求めたことは、神から与えられた律法の解き明かしです。第七の月の一日、すなわち新年の始まりの日に大人の男女が皆集まって、夜明けから正午まで、エズラやレビ人が語る律法を聞き続けました。そこで民が、「皆泣いていた」というのは興味深い点です。モーセの時代から主が民全体を導いてこられたことへの感動なのか、自分や先祖がこれらの律法に反していたことを思い起こし罪の意識を持ったのか、など想像と議論の余地はあります。ただ、続く9章で民が自分や先祖の罪を告白している点を踏まえるならば、おそらくは律法が示す神との約束と、自分たちの乖離に胸を打たれたのでしょう。民が、御心に反した生活を続ける中でバビロン捕囚という出来事が起こされ、そこから帰還し、神殿が再建され、城壁も作られ…と、形としての復興は概ね完成しました。最後に、民が本当の意味で神さまの元に立ち返るために、この涙は必要な過程だったのです。

悔い改めの涙を民が流しているのならば、あえてそれを止める理由は無いようにも思われます。しかしエズラたちは、「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」となだめています。さらに「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。」とまで語り、いわばお祝いのパーティーをなさいと勧めています。続く「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」という言葉は、今を生きる私たちにも大変力強く響いてきます。主の前に、抱えきれない嘆きや、告白すべき罪を差し

出すこと、そして悔い改めの思いを持って主と向き合うことは何ら間違ったことではありません。むしろ、自分は大丈夫だなどと慢心しないためにも、常に主の前にへり下り自らを省みることが大切です。しかし、間違いだらけの自分をも主が愛してくださっていること、様々な困難を主の助けで乗り越えてきたこと等を思い起こす時、私たちの心は感謝と喜びに満たされます。こうした感情もまた、何ら躊躇することなく表現してよいのです。シンプルな言葉に置き換えるなら、神さまに対しては「ごめんなさい」と「ありがとうございます」がどちらの思いも大切であり、今日の箇所においてエズラたちは「“ありがとうございます”も忘れないようにね。むしろそれこそが、あなたたちの力になるのですよ」と教えているのでしょ

これを私たちの礼拝と重ねて考えてみるならば、常盤台教会の礼拝は比較的静かな雰囲気を守られますから、感謝や喜びの直接的かつ爆発的な表現はしづらいかもしれません。しかし賛美の歌声や「アーメン」の声に、そうした思いは込められます。また、この成人科のような学びの時、あるいは交わりの時に、神さまの素晴らしさを思い起こし、語り合うこともできます。エズラが「**備え（肉や飲み物）のない者には、それを分け与えてやりなさい。**」と語ったように、主を喜び祝うことは、正に共同体としての業です。

11月も半ばとなり、聖書教育誌も再来週からクリスマスに向けた箇所に入っていきます。ネヘミヤ記の時代と異なり、私たちはイエスさまが来られた後の時間を生きています。イエスさまの誕生、私たちへの福音、そして贖いと復活。喜び祝いたいことは沢山あります。「**集まって一人の人のように**」なることの恵みを噛みしめているこの時期に、信仰の原点に立ち返る意味でも、捕囚後の民が神との関係を回復していく姿から学べる事が多くあります。喜び祝う信仰生活、喜び祝う教会としていま何ができるのか、共に祈り求めてまいります。

● 分かち合い

- ・ 律法を聞いて涙を流す民は、どのような思いを持っていたのでしょうか。またその思いに、共感される部分はありますか。
- ・ 技術の発展により、会堂に集まらずとも共に礼拝や交わりができるようになりました。その中で敢えて実際に集まり「喜び祝う」ことには、どのような醍醐味があるのでしょうか。

(担当：K.G.)